

にっぽんふどうき

日本婦道記

梅咲きぬ

山本周五郎

目次

—

⑤「どうかしたのか、顔色がすこしわるいように思うが」

直輝なおてるの気づかわしげなまなざしに加代かよはそっと頬をおさえながら微笑した。

⑥「お眼めざわりになって申しわけがございません、昨夜とうとう夜を明かしてしまったものでございますから」

⑤「どうして、なにかあったのか」

⑥「……はあ」

腫れぼったい眼もとで恥はずかしそつにちらりと良人おとこを見あげた。病身びやみというほ

どではないにしても、骨ほねはその手弱たおやかなからだつきで、濃おすぎるほどの眉まゆにも

臙脂べにをさしたような朱あかい唇くちもとにも、どこかしらん脆もろい美うしさが感じられる、

直輝なおてるは妻つまの眼もとを見て頷うなずいた。

⑥「そうか、歌か」

⑤「はい、寒夜かみちやの梅うめという題だいをいただいているのですけれど、どう詠よみましても

古歌こかに似てしまいますので「

⑤「一首もなしか」

⑥「明けがたになりましてようやく」

⑤「それはみたいな」

直輝なおてるは袴はかまひもの紐ひもを、きゅっとしめながら云った。支度しどがすんで居間いまへもどる

と、茶ちやを点たてて来た加代かよは、羞はじをふくみながら一枚まいの短冊たんさふをそっとさし出した。

⑥「おはずかしいものでございます」

直輝なおてるは手てにとって、くりかえしくちずさんでいたが、やがてしずかに

天目てんもくをとりあげて妻つまを見た。

⑤「一昨日いつさくへきじつであったが、横山よこやまが妻女さいじよのはなしだといって、お前まへにはもう間も

なく允可いんかがさがるだろうと申まをしていたが、そのようなはなしがあるのか」

⑥「はい、ついせんじつそういう「内談ないだんはございました、ですけどまだわた

くしは未熟者みじやくでございませうから」

つつましく眼まなこは伏ふせたけれど、そっと微笑くちする唇くちもとには確信かくしんの色いろがあった。

⑤「允可いんかがさがったら歌会うたかいでも催もよおすかな」

そう云いって直輝なおてるは立たった。隠居所かくいよへゆくと母ははのかな女じよは古い小切こぎれを集あめてなにかはぎ縫ぬいをしていた。

⑤「母上ははただいま登城とじやうをつかまっています」

⑦「「苦勞くろうでございませう」

かな女じよはめがねをとり、会釈かいしゃくをかえしてから見送みおくるために座ざを立たった。

家扶かふ、家士かしたちと共に、直輝なおてるを玄関げんかんに見送みおくったかな女じよは、嫁よめと廊下らうげをもどり

ながらその顔色のすぐれないことに眼をとめた。加代は良人に問われたよりも心ぐるしそつじ、

⑥「つい夜更かしをいたしましたし、
と低いこえで答えた。」

⑦「そついえば、あなたのお部屋の窓にいつまでもあかしがうつっているの、
お消し忘れではないかと思いました」

そつ云ってかな女はふと嫁の眼を見た。

⑦「それで歌はおできになりましたの」

⑥「……はう」

加代はどきっとした。夜更かしをしたといえは歌を詠んでいたということはすぐわかる筈ではあるが、その時は妙にふいをつかれた感じだった。

⑦「しばらくあなたのお歌を拝見しませんから、近作といっしよに、持って来て
拝見させて下さらないか」

⑥「御覧いただくよつなものはございませんけれど」

予感というのであろう、加代の心はつよく咎められるような不安を感じた。かな女は部屋をきれいに片づけ、香をたいて待っていた。この屋敷には梅の木が多かった。とりわけ隠居所の前には「きあるじ三郎左衛門が」蒼竜」と名づけた古木があつて、佶屈とした樹ぶりによく青苔がつき、いつも春ごとにもつ

とも早く花を咲かせる。いまもまだほかの梅は蕾がかたいのに、「こころではもつ

梢のあちらこちら、やわらかくほころびかかっているのがみえた。ぬれ縁から部屋の畳一帖ほどまで陽がさしこんでいた、微風もなく晴れたうららかな朝

で、いかにも春の近いことを思わせる暖かさだった。加代はきちんと坐り、膝の上に重ねた自分の手をじっと見まもっていたが、一睡もしなかつた疲れがしだいに出てきて、ともすれば気が遠くなりそうなるほどのねむけに襲われた。

⑦「昨夜お詠みなすつたのはこの寒夜の梅というのですか」

十枚ほどある短冊をゆっくりみていたかな女が、さいこの一首をつくづく読
んでから云った。

⑥「……はい」

⑦「みごとにお詠みなすったこと、本当に美しくみごとなお歌ですね」

⑥「お恥ずかしゅうございます」

⑦「僅かなあいだにたいそうな上達です、これだけお詠めになればもうおんな
のたしなみには過ぎたくらいでございます」

かな女は短冊をじずかに置き、やさしく嫁の顔を見やりながら云った。

⑦「もうお歌はこのくらいにして、またなにかほかの稽古をおはじめなさる
のですかね。さあ、こんどはなにをなすったらよいかしら……」

二

加代はいっぺんにねむけから覚めた。歌稿をみたいと云われたときの不安な予
感があたりしくよみがえり、おそれていたことがやはり事実となってあらわれ
たのを知った。

⑥「お言葉をかえすようではございますけれど、もうすしお稽古を続けさせて
頂けませんでしゅうか、まだ道のはしも覗いたようには思えませぬし、ようやく
字数を揃えることができるようになっただばかりでございますから」

⑦「それでも噂に聞くと、あなたにはもうすぐ允可がさがるそつではありませ
んか、それだけ上達すれば充分です。あなたはからだがいあまりお丈夫ではないの
から、こんどはすし薙刀でもおはじめなさるがよいでしゅう」

⑥「……はい」

加代はそれ以上なんと云うすべもなく、うなだれたままそつと歌稿をまとめて
立った。

直輝がお城からさがって来たのはもうすっかり暮れてからのちだった。

藩主加賀守綱紀が在国ちゅうで、ずっと御用が多いため下城はいつもおくれがちであった。風呂からあがり、お膳食にむかった彼は、妻のようすが朝とはかくべつ憔悴しているのに気づいて、昨夜ねむっていないという「ことを思いだした、夜を徹したから」といって武家ではそつむぎと風寝をする「こと」はできない、

⑤「早く寝所へはいるがよいな」

そう云って、彼は食後の茶もはやくきりあげ、自分は書斎へ灯をいれさせて立った。

四五日はなに「こともなく過ぎたが、直輝はやがて妻のようすがいつまでも沈んでみえるのに気づいた。どこか悪いのではないかとたずねると、そんなことはないと答えてさびしげに頬笑むだけだった。それである夜、そつと妻の部屋へいってみると加代は灯のかけで、歌稿を裂き捨てていた。

⑤「どうしたのだ」

ふいにはいって来た良人を見て、加代はとりちらした反古を慌てて押し隠そうとした。

⑤「お待ち、どうしてそんなことをするのだ」

加代はだまって悲しげな眼をあげ、すがるように良人を見あげた。直輝はその眼をみて事情を了解した。

⑤「母上が仰しかったのか」

⑥「……はい」

⑤「云って「らん、なんと仰しかったのだ」

加代はなかなか云わなかったが、直輝につながされてようやく先の日の「ことを告げた。

⑥「わたくし、「むね」そやりとげてみたいと存じました。鼓のときも、茶の

湯のときもそれほどではございませんでしたけれど、和歌の道だけは奥をきわめてみたいと存じておりました」

言葉が感情の堰を切ったように、彼女にはめずらしく情の熱した調子で云った。

⑥「加代はぶつつか者でございませうから、母上さまのお氣に召すようには甲斐性もございませぬ、けれども自分ではできるかぎりをおつとめ申しているつもりでございませう、……からだが弱いためお子をもつけることもできません、いろいろ考えますとわたしは」

⑤「もうおやめ、それ以上はわかっている」

直輝はやさしくさえぎった。

⑤「おまえがよい妻だといつことは母上もよく存じた。二千石の家政をとりまきってゆく苦心がどれほどのものか、わたしにはわからないが母上にはおわかりになる、おまえほどの若さでよくやって呉れると折にふれては仰しゃっておいでだ、ただ母上の「氣性が……」

云いかけて直輝はふと口をつぐんだ。

彼は母のひとがらを尊敬している。世にまたとなき母だと信じている、かな女は身分の低い家に生まれ、十六のときこの多賀家へとついで来た、多賀は前田家の重職のいえがらで、父の三郎左衛門は若年寄をつとめていた。育ちが低いの

でどうかとあやぶまれたが、かな女は二千石の家政をみごとにきりもりした。

その点では賢夫人と名に立ったくらいである。彼はいまでも覚えていて、父が臨終のとき、ふと母のほうをふりかえって、――おまえとは三十五年もひとつ家に住んで来たが、とうとう一度も叱るおりがなかったな。そう云ってかすかに笑った。本当に三郎左衛門はいちどもかな女に荒いこえをたてたことがなかった。そういう母であったが、ひとつだけどうにもならぬものがあった、それはものに飽きやすい氣質だった。老職の妻として教養を身につけたいという気持で

あろう、家政をとるいとまに茶の湯、華、琴、鼓などという芸事をずいぶん熱心にならった、また生得さかしい彼女はその一つ一つにすぐれた才分をあらわして、その道の師たちをおどろかしたものであるが、どれも末を遂げたものがなかった。もう一步というところまでゆくと必ず飽きて捨ててしまった。ではもうやめるかと思うと、つきには絵をやり連歌をならい、詩を勉強し、俳諧にまで手をのびした、そしてどの一つもついに奥をきわめるところまでゆかずに捨ててしまった。

三

加賀守綱紀はそのころ天下の名宰相といわれ、文治武治ともにすぐれた治績をあげたが、なかにも学芸には最もちからを注ぎ、名ある鉅儒名匠を招いておおいに藩風を振興した。新井白石は加州を「天下の書府なり」と云い、荻生徂徠は「加越能三州に窮民なし」と云った。また明の僧高泉は文宣王の治世に比して「さらに数歩を進めたるもの」とさえ称した。名だかい加賀の能楽も、綱紀の世にしっかりと金沢に根をおろしたのである。二ついうありさまなので、しぜん武家の婦人たちのあいだにも文学技芸がさかんだった。歌会、茶会、謡曲の集いなどがしばしば催され、ずいぶんすぐれた才媛もあらわれた。かな女はそういう人々のなかでつねに頭角をぬきながら、なに一つ末遂げたものがなかったもので、――あれだけの才がありながら。とその飽きやすい氣質を惜しまれたものであった。

加代が多賀家へ嫁して来て三年になる、実家にいたときから鼓をやっていた彼女は、多賀家へ来てからも良人のゆるしを得て稽古をつづけた、しかし半年

ほどすると、しゅういん 姑このかな女にょが、もうやめたりどうかと云いだした。——しゅういん 鼓こはもうそのくらくらにして茶の湯を稽古きこして「らん。もう少しと思おもったけれど、加代はしゅういん 姑このいうままにつづみ 鼓こをやめて茶の湯をはじめた、まえにいちおう道みちが
いてるので、進すすみかたもはやかたし興味も深こくなつたが、また半年ほどする
とそれをやめて和歌につかせられた。そのころすがましず 菅真静まじずという歌学者うたがくしやが前田家まへだけに
めしかかえられていた。加代はその門かどに入ったのである。十一二歳のじぶんか
ら

しんこきんちやう 新古今調しんこきんちやうの手ほどきをつけていた彼女じよは、鼓こや茶の湯ちやのゆのときよりかくべつ熱あつ
心にまなび、えいそつ 詠草えいそつの成績せいせきもめきめきとあがつた。——この道みちこそは奥おくをきわめ
てみたい。自分じぶんでもそう思おもい、師しの真静まじずもとりわけ親切しんせつに指導しうばうして呉くれた。当時たうじ
は歌道かどうなどにも口伝くでん、秘伝ひでんなどというものがあつて、それは師しの衣鉢いはつをつぐ者もの
か、よほど秀拔しゆはつなものでないと与よえられなかつた、加代かよのめざましい進歩しんぷは、間ま
もなくその奥義おくぎゆるしを受けられるところまで来ていたのである。

「じよ 二つという反面はんめんに、むろん彼女じよは多賀家の主婦しよめとしてりっぱにそのつとめをは
たしていた。武家ぶけで二千石にせんいしというと大身たいしんのほうで、家来小者けらいせうしやの数かずも少なくはな
い、家政けさうのきりまわしも粗忽そこつなことではむつかしいのである、加代かよは若いけれど
も しゅういん 姑この指導しうばうをまもつてよく働はたらいた。良人りやうじんに仕つかへることも貞節ていせつだつた、その
ことは親族しんぞくのあいだにも評判へいぱんで、——多賀たがの嫁よめは しゅういん 姑こに劣せうらぬ出来者できものだ。と云
われているほどだつた、だから直輝なおてるも和歌わがの道みちだけは、加代かよの才能さいのうを充分じゆうぶんに伸
ばしてやりたいと思おもつていたのである。それが、しゅういん 鼓こや茶ちやの湯ゆのときとおなじよ
うに、またしても母ははからやめると云いわれたと聞いて、彼かれはすくなくからず当惑たうわくを
し、同時にまた昔むかしからの母ははの移うつり気きな性質しやうしやうを思おもいだしたのであつた。

母の気性がと云いかけたまま、ややしばらく黙っていた直輝は、やがて妻を
はげますように云った。

⑤「ほかの事とはちがって、おまえの和歌の才だけはかくべつだ、わたしからそ
れとなく母上におはなし申してみよう」

⑥「でもそれでは、わたくしがお訴え申したようで、悪うございますから」

⑤「それほど物のわからぬ母ではない、残った草稿は捨てずに置くがよいぞ」

加代は良人の温かい気持を胸いっぱいを感じながら、裂き残した歌稿をつつま
しく集めた。

その明くる夜、直輝は隠居所をおとずれた。数日まえから端ぎれを綴り縫い

していた母は、ちようとそれを仕上げて火熨斗をかけているところだった、座蒲
団を細く小さくしたようなものである。なにがお出来になりましたときくと、加
代にやる肩蒲団だと答えた。

⑦「あの寝部屋は冷えますからね、それにあのひとはあまりお丈夫ではないか
ら、……これを肩に当てる寝るといいとおもって」

⑤「それはさぞ珍重に存じますよ」

云いながら直輝はふと微笑した。

⑤「しかしなんだか話が逆でございますね」

⑦「どうしてです」

⑤「それは加代から母上にさしあげる品のように思われますよ」

⑦「でもあたしは丈夫ですから」

そう云ってかな女も苦笑した。

愛している者でなければ、そういつこまかいところに気のつく筈はない、母は
加代を愛している、直輝はいま眼のまえにそのあかしを見たと思じた、それで

和歌のことを話しました。もう間もなく奥義の允可がさがるといつところまで
きているのだし、その才能にもめぐまれているようだから、家政に障りのない程
度で稽古を続けさせてやりたい、そういう意味のことを、自分からたのむという
調子で、しずかに話した。

四

かな女は黙って聴いていた、直輝がすっかり話し終るまで黙っていたが、べつに反対はしなかった。

⑦「それもいいでしょう」

と云っただけで、すぐにほかの話をはじめた、なんのわだかまりもないさっぱりとした調子だった、直輝は安心して隠居所から出た。

あくる朝だった、直輝が登城すると間もなく、蒼竜がみごとに咲きはじめてから観に来るようになると呼ばれて、加代は隠居所へいった。暖かい日がつづいたためであろう、若枝や梢のほうにふくらんでいた蕾が、およそ四分がた、いっせいに咲きだしていた。

⑥「まあみごとでございませう」と

思わず声をあげながら、濡れ縁に坐ろうとする加代を、かな女は部屋へ呼びいれて相對した、それで加代ははっとした、呼ばれたのは梅を観るためではない、

姑の眼はいつものやさしいなかに屹とした光があった。——和歌のお叱り

だ。そう直感した彼女は、塞がる感じだった。

⑦「きょうは、わたくしの思い出ばなしを聴いて戴こうと思ひましてね」

かな女はしずかに云った。

⑦「年寄の愚痴はなしです、これまで誰ひとりうちあけたことのない、恥ずかしはなしなのです、聞いて呉れませうか」

⑥「はい、うかがわせて戴きます」

⑦「かた苦しく考えないで、膝をらくくにして聴いて下さいよ」

かすかな東風が、梅のかおりをほのかにおくってくる、かな女はそのかおりをきき登りますよつなしすかさで話しました。

⑦「わたくしが多賀の家へとついで来たのは十六歳のときでした、実家の身分が

低く、稽古^こごとも思つままにはならなかつたのでわたくしは本当になにも知らぬ愚かな嫁でした。とついに来てから十年というものは、まるで闇のなかを歩きぐりであるくように、やっとその口その口を送っていたようなものです、ただお姑^{かあ}さまがお情けのふかいよくお氣のつくかただったので、このかたおひとりを頼りに一つ一つ家政を覚えたのでした。……そのお姑^{かあ}さまが亡くなって、ひとりあるきしなければならなくなつたときは、どんなに悲しく、心細かつたことでしょうか、しばらくのあいだはまったく途方にくれてしまいました。そしてこれではならないと立直つたとき、わたくしは「こういうことを考えました。それは、老職の家の妻として恥ずかしからぬよう、またとかく狭^き量^{りょう}になりやすい女の氣持をひろくするため、なにかひとつ教養として芸を身につけたい」といつどこです、わたくしは良人^{おつと}のゆるしを得て茶の湯をはじめました」

かな女^{おんな}はそこで言葉をきつた、そしてそつと眼を伏せ、ややながいことなにか思い出す風だったが、やがてまたしずかに話をつづけた。

⑦「自分の口からいつ云つては、さぞさかしらに聞えることでしょうけれど、わたくしは茶の湯の稽古でたいそつ才を認められました、傍^{わらわ}輩^{はい}の噂にもなりお師匠さまからも折紙をつけられるといつところまでいったのです。そのとき、わたくしは茶の湯をやめました」

加代はじつと 姑^{おつと}を見あげた。

⑦「良人^{おつと}も惜しんでくれました、しりびとのたれかれもしきりに続けるようにすすめてくれました、けれどもわたくしはそのときかぎりやめて、つぎに

宝^{たから}生^{なま}流^{りゅう}の笛のお稽古をはじめたのです。……笛のつぎには鼓をならいまして、連歌や詩や絵などもお稽古をしました、そのなかには茶の湯のように、人にすぐれた才を認められて、どうかして未^{すなは}遂^{てい}げるまでやりぬくようにといわれたものも一つや二つはありました、でもわたくしはどれにも奥底まではゆかず、九分どりでやめてしまったのです。世間では、わたくしの才を惜しんでくれまし

た、またわたくしが飽きやすいと云って笑いました、良人おつてさえも時おりは移り気なことだと苦々しげに仰しゃっていました、……加代さん、わたくしが昔むかしことをつぎつぎに変えたのは移り気からだとお思いになりますか」

⑦「武家のあるじは御しゅくんのために身命みことの「奉公ほうこうをするのが本分です、その「奉公ほうこうに瑾きんのないようにするためには、些ちやかでも家政かせいに緩みがあってはなりません、あるじの「奉公ほうこうが身命みことを賭としているように、家をあずかる妻のつとめも身命みことをうちこんだものでなければなりません。……家政かせいのきりもりに怠りがなく、良人おつてに仕えて貞節おんねなれば、それで婦おんなのつとめは果されたと思うかも知れませんが、それはかたちの上のことにすぎません、本当に大切なものはもっとほかのところにあります。人の眼にも見えず、誰にも気づかれぬところに、……それは心です、良人おつてに仕え家をまもることのほかには、塵ちりもとごめぬ妻の心です」

⑦「学問諸芸にはそれぞれ徳があり、ならい覚えて心の糧かてとすれば人を高めます、けれどもその道の奥をきわめようとするとよくなる』妻の心』に隙ができません、いかに獵との名人でも一時に二兎にとを追うことはできません。妻が身命みことをうちこむのは、家をまもり良人おつてに仕えることだけです、そこから少しでも心をそらすことは、眼に見えずとも不貞をいなくことです」

⑥「母上おんさまさま」
加代が、とつぜんそう云いながらひれ伏した、つきあげるような声だった、そしてひれ伏したその背がかすかに顫ふるえた。

⑥「わたくし、あやまっております」
⑦「……加代さん」
かな女じよは頷うなきながら云った。

⑦「もう仰うしゃるな、年寄の愚痴ぐちがいくらかでもお役にたてばなによりです、そ

して、その覚悟さえついておいでなら、歌をおつづけなすっても結構なのです
「よ」

しずかに微笑しながら云うかな女の、老をたたんだ顔には些かな驕もなかった。武家の妻としての、生き方のきびしさ、そのきびしい生き方のなかで、さらに峻烈に身を持してきたかな女のこしかたこそ、人の眼にも触れず耳にも伝わらぬだけ、霜雪をしのいで咲く深山の梅のかぐわしさが思われる。

⑦「こんなものを作りました」
やがてかな女は、端ぎれを継いで作った肩蒲団をとって、そっと嫁の前に押しやった。

⑦「あなたのお寝間は冷えますから、これを肩に当てておやすみなさい、これになかなか温かいものですよ」

その日お城から帰った直輝は、妻の顔色が見ちがえるように冴え冴えとしているのにおどろいた。

⑤「どつしたのだ、なにかたいそうよいことでもあったようではないか」
そう云うと、加代は胸に包みきれぬよろこびを訴えるように云った、

⑥「はは上さまから頂戴ものをいたしました」
⑤「……なんだ」

知ってはいたが、わざと直輝はそう訊いた。

⑥「肩蒲団でございませす、」存じではございませんでしよう」
加代はむしろうきうきしたともいえる調子でそう云った、

⑥「やすみますときに、枕と肩との間に当てるものでございませすの、老人の使うものでしょうけれど、わたくしの中からだを案じて、はは上さまがご自分で作って下すったのです」

⑤「それがそんなに嬉しいのか」
⑥「旦那さまにはおわかりあそばしませんでしょうけれど」

加代はそう云いかけ、ふと眼をあげておのれをかえりみるように云った、
⑥「わたくしもはは上さまのよつに、やがては嫁に肩蒲団を作ってやれるよう

な、よ、い、姑「なりたいと存じます」

